

## 温熱化学放射線療法で QOL 改善が得られた乳癌多臓器転移の一例

戸畑共立病院 樋口優子、大田真、垣下ひかる、溝口勢悟  
森岡丈明、鞆田義士、成定宏之、今田肇

40 歳代女性。2012 年 5 月前医にて左乳癌と診断され、術前化学療法（FEC 療法と DOC）を施行。2013 年 1 月左乳癌摘出術施行。2014 年 10 月骨転移あり。本人の希望によりビタミン C 療法のみ施行。2015 年 11 月肺・肝・骨転移あり。2015 年 12 月当院初診。骨転移による痛みあり、治療ベッドへ移動することさえも困難な状況。化学療法は Weekly PAC を 3 コース、Biweekly PAC を 4 コース施行。温熱療法は骨盤と肝臓を加温。骨盤加温は計 10 回、平均  $770 \pm 151.3W$ 、50 分施行。肝臓は計 7 回、平均  $978.6 \pm 56.7W$ 、50 分施行。放射線療法は骨盤に対し  $2Gy/10$  回施行、胸椎に対し  $2Gy/10$  回施行。

初診時は骨破壊が著明で体動すら困難であったが、温熱化学療法と少量の放射線治療により、比較的短期間で全身状態の改善が得られ、歩行が可能にたり外来通院可能となった。また、難治性の腫瘍であっても局所治療が QOL の改善に貢献すると予測される際に、温熱療法の併用は大きなメリットがあると考えられた。